

現代学生の生きがいについて（58・4・16）

石井完一郎（昭17・3文乙）

一 二つの修羅場で

私はこの四月に京都大学を定年退官したばかりですが、昭和十七年文乙卒の後、京都大学農学部に進みまして、丁度、奥田東先生がお若い頃で、先生の単位で優を頂いた覚えがございました。それから学徒出陣をして、フィリピン戦線で米軍戦車への特攻で負傷いたしました。その後、ジャングルで二度自決を試みたのですが、一度目は帯剣が錆びついて切れなくて、二度目は手榴弾の安全弁を引くとこれも錆びついていて抜けなかったのです。数年前にロスアンゼルスで自殺防止センターでこの話をしましたら、「三度目はなんでやらなかったのか」という野次が飛びました。「三度目は軍服のシラミ退治に夢中になってシラケた」と話していたのです。戦争で「生死の修羅場」を潜りぬけて帰ってきて、戦争のショックで文学部に転じて後、四十年程「おまけの人生」を過ごしているのですが、皮肉なことに今度は「自由の修羅場」京都大学で、三十年近く全

学のカウンセラーをおおせつかる一方、教育学部でカウンセリングを、医学部で自殺学を講じてまいりました。長いだけ取り柄がありますが、最初に私の妙な綽名をご紹介します。自由の修羅場で「阿修羅」のごとくやっておりますと、阿修羅の姿が学生には色々に見えるらしくて、第一に「消防自動車」という綽名がごさいます。これは教育学部に出講しておりまして、「鐘が鳴ったらずぐ出てきよる、火事がおさまってもなかなか現場を立ち去らない」とか。口の悪い奴は「何言ってるんだ、折角燃えかけている火に水をかけよる」とか。第二は、私は日本自殺予防学会の会長をやっていた関係上、当時、大阪と奈良と神戸の三つの「いのちの電話」を応援していましたが、大阪は「関西いのちの電話」と称して、京都はその守備範囲に入っているからつくらなくていいと思っていたのです。ところが、急につくらなくてはならない羽目になりまして、奥田先生に社会福祉法人の理事長をお願いしまして、私は運営委員長ということで、巨大な資金を集めなくてはいけないのですから、一念奮起、変身のために髭を生やし始めたのです。そうしたら、金はちっとも集まらないのに失恋した女子学生の来談が妙に多くなりまして「千石イエス」とか。そのうちに或る女子学生から私小説を書いて送ってきまして、「題をつけてくれ」という訳です。読んだら私が登場していまして、「彼の髪が黒々として年より若く見えるのは、ドラキュラ伯爵となって若者の生き血を吸っているせいである。だが、私は生き血をやらん」と書いてありました。とうとうドラキュラーにされましたが、実は私はクリスチャンなので、十字架に弱い

点はまさにいえているなあと思う訳です。さらに手紙が来て、「脱走兵をぶち殺さないで戦線に連れもどす親切的憲兵」とか。「言えてる」と返事を出しました。そういうことで、多様な役割を果たさねばならない修羅場でありましたが、京都大学には大物が多いものですからほとほとくたびれ果てまして、今、退官とともにガックリしている最中であります。だが、退官をしましても、ガス栓を開きたくなったら私の家に電話をしてもよろしいという許可を与えた元学生のケースが九名にもものぼっております。その諸君を引きずりながら退官をしておりますものですから、今、竜谷大学に職をもつていてノートを作らねばならんし、片一方は、電話がかかってくるし、電話で昨夜も女の子が泣いていました。第一、このネクタイは未遂数回の女の子がくれたネクタイで、このタイピンも未遂数回の男子学生がくれたタイピンです。こんなのを日頃締めて歩いている訳ですから、だいたいお察しがつくと思います。今日は「カウンセラー二十七年を顧みて」という副題で、改めて三高同窓会で定年退官講義をさせて頂く様な気持がいたします。

二 昔の青春

私達の若者時代においては、学徒出陣の日が迫ってくるにつれて非常に脳裡を支配した大きな問題は、いかにして死に対する覚悟を定めるかという一事だったのです。当時から私はすでにクリスチャンでしたから、神様の命令ならなんとか死ねそうでしたが、どうにも腹の底から「天皇

「陛下万歳」を叫べそうになかったのです。そこで一晚中苦しみぬきまして、でっぴあげた論理がどんな論理かといいますが、当時天皇は「現人神（あらひとがみ）」と申しました。人間になった神様だと。これは国家神道でそう言っていたのです。そこで私は、国家神道とキリスト教を強引にセメダインでくつつけるように合体してしまったのです。「天皇は現人神である。よって、神の意思の代行者である」と。一晚で促成のマジメ愛国青年が出来上がりまして、親友に電話を掛けまして、「俺は死ぬる」と。親友は慌てたそうで「俺はまだだ」と。そういう風に当時は死にがいに急がせられました。その後、私は輸送船に乗せられて、東支那海を一路南下した訳ですが、当時すでに米潜水艦が出没しておりまして、輸送船はそれを避けるべく燈火管制して、ジグザグ航路をとりながら船体を軋ませて走っていた訳です。船上の甲板で、私は星を仰いだのですが、北斗七星が北回歸線のかなたに沈んでいくのと同時に、南から南十字星が上がってきた。私は十字架状の星に向かって篤い祈りを捧げました。その内容は、「もし神の御心ならば火の中、水の中もいとわじ、されど、御心ならば再びこの東支那海を北上生還させ給え」と。この二つの祈りは文字通り聞き届けられまして、私を待っていたのは鉄火の洗礼であり、生き地獄でありました。今一つの祈りも聞き届けられまして、奇跡的に今ここに立っている訳ですが、国家神道とキリスト教をセメダインでくつつけた様な無理をしなければ死に対する覚悟が出来なかつた。いうなれば、学生服の次に軍服が待ってあって、背広を着られる保障はどこにもなくて、そこは死の深い断崖

でありました。それに比べますと、今の若者は、軍服はまず待っていない。何時までもジーパンを長くはきながら、「モラトリウム」（猶予期間）と申しまして青年期を引きのばす訳ですが、そういう点では、私らの灰色の時代に比べてある意味ではバラ色で幸せである。しかし、それだけ長く青年期を引きのばしながら、価値が非常に多様化した中で真の生きがいを探求せざるをえない点ではより困難な状況におかれている訳です。まず最初に今日のメーン・テーマであります現代学生がいったい何を生きがいに行っているかということから入ります。そして、私が長年の間にわけてきた、自殺を考えた学生との出会いの壮烈な関わりを申し上げたいと思います。

三 今の私事主義とモラル

現代学生の生きがいの傾向を申しあげると、京都大学というキャンパスに偏ってはいませんので、総理府、文部省、その他の全国的調査が八回ぐらいございますが、これらのレポートをふまえて申しあげたいと思います。総括いたしますと、若者の大体七〇パーセントぐらいは、「その日を呑気に暮らす」、「自分の好みにあった暮らし」と、これらを一括して申しあげますと「私生活の幸福追求型」です。アメリカにプライバティズムという言葉がありまして、「私事主義」と訳されていますが、これはマイ・ホーム主義よりちょっと狭いのです。マイ・ホームですと家族が入ってきますが、自分一人のプライベートな幸せの探求という姿勢です。ですから、

例えば戦争反対でも、「自分が死にたくないから戦争に反対」というのです。他方、「飯を食いた
いが金がない」という現実の目先の壁が悩みなのです。繭の中のサナギの様な状態で、他人との
関わりとか、未来が閉塞してきます。目先の壁と自分が一番大事なのです。最近はこのミイ
ズムという傾向にまで発展してきています。「身勝手」という意味に訳しています。他方、私生活
の幸せ追求での幸福主義というものは、アメリカの偉大な心理学者ウイリアム・ジェームスに言
わせると、「生きがいのある人は愛他的である」といつているので、自己中心性、他人への思いや
りの欠落というのはいつか生きがい喪失につながるはずです。そうやってきた原因の第一は、や
はり戦後のモラルの問題があります。我々の時代はご承知のごとく「滅私奉公」であります。そ
れが敗戦とともに「滅公奉私」になってしまった。おまけに最近の既成政党の腐敗・墮落は、ま
すます「滅公」を若者に煽っています。ある若者が私に言いました。「先生、今の世の中は万事、
金とコネですな」と。しかも、人権思想が入りまして、自分自身だけを大事にする思想は、絢爛
として多様化の一途をたどる。昔は「滅私奉公」ですから、一様に私を抑圧するという克己心（ス
トイシズム）が美德とされ、日本の国家神道が「奉公」を強要したわけです。

四 家族関係から

さらに第二の原因としては、家族構造の変化で、「少産長命型」の家族に変わったことです。今

は子供の数は平均二人以下で、長命型です。戦前は三人位で、短命型です。おかあちゃんは下の子が小学校出る頃に五十才ぐらいでお迎えが来る。「お母さん死んだら御飯はこういう風にたくものよ」と自立を促したものです。今や日本の母親は世界で二番目に平均寿命が長くて、八十才位です。子供が少なくて、お母ちゃんが長生きしますので、母子ゆ着して入学式についていくどころの騒ぎではない。入社式にもついて行くし、孫の面倒まで見る気にいる人もいます。先日東京都大学の入学式に参列してみたら相変わらず親が多いですね。新入生のほぼ三分の二位の父兄が行っています。中には、おじいちゃん、おばあちゃんまでついて来ています。総長室の前を行事があつて通りかかったら白髪のおばあちゃんがうろうろしている。挙動不審なものですから「何しに来てはるのですか」と聞きますと、「今度孫が修士を出ますので、一目死に土産に総長さまのお部屋を見たいと思ひまして」というのです。その切なる気持が判らないではないけれども、これでは孫も大変だなあと思ひます。毎年、京大受験生の父兄を集めて「受験についてくるのは仕方がないけれど、入ったら絶対に入学式に出ないでほしい」と話しているのですが、私がいった位ではあきませんね、ゾロゾロとついてこられて、立見席は一杯です。そういうことではなかなか自立出来ないし、子供はどうしてもチンマリしてしまつて、小市民的な生き方で、自分の幸せだけを追求するはずです。小市民的というと、どこかに大市民主義があるはずですが、これは全共闘の諸君です。万国に自由・平等を輸出しようと「片手にピストル、心に花束」で、これは今

や少数派になりました。そうすれば中市民主義があるはずですが、これはボランティア活動です。最近、学生達もボランティアの方向に脱出口を求めつつある傾向が見うけられます。次に多数派の小市民的な生き方を最もよく示す一つの例を申しあげたいと思います。ある人文系学部 of 学生ですが、こういう相談で来ました。「初恋の彼女と婚約出来たので、二人でアメリカへ留学したいが、そういう道がありませんか」と言うのですね。「ないことないのだが、ちょっと聞きたいが、帰って来てどうするの」と聞くと「一流会社就職したい」、「それから」と聞いたら「十年ぐらいたら係長ぐらいですかなあ」と。その辺はよく知っていますね。一流会社は管理職になるのには十年ぐらいかかると。「それから」、「十年ぐらいたら課長ですかなあ」、「それから」といえば、「十年して部長になったらよろしいが」、「それから」。そこで、彼はやおら指折り数えて「あ、もう定年退職ですなあ」と。「それから」ときくと、「退職金で緑の芝生のある家を買って、ベランダでねてリンゴの皮をむく。初恋の彼女が静かにコーヒーをはこんで来る。その時こそ人生最高であります」といったので、私はガツクリしてしまったのです。なぜか。昔の若者、とくに三高生はそんなみみちいことは言わなかったと思いますね。「十年して係長」なんて言っていないですよ。十年したら課長も飛びこえて部長ぐらいになっていて、もう十年ぐらいしたら「日本の産業界をリードして」と天下国家を論じて、出来ぬことは知りながらホラを吹いたものですね。糸が切れた風の様に「青年よ大志を抱け」と天に上る一方です。今は十年ごとに着実に係長、課長、

部長になつてから、見事なカーブを描いて緑の芝生に落下していくわけですね。第一、六十才を越えてですね、リングがシャキシャキかじれるかというのです。自分の入れ歯がガタガタになっているのにです。また、「初恋の彼女」といっても、おばあちゃんにヨロヨロとコーヒーを持ってこさせて自分はひっくりかえっていて何が楽しいのか。しかも、大事なことは母子ゆ着の一方で、お父ちゃん、お母ちゃんが全く欠落しているのです。「君の両親はいつたどこに消えているのだ、どこかの老人ホームにはうりこむもりか」と。そこには自分と初恋の彼女しか登場してこないのですね。こういう例で見る今のプライバシーズムという傾向は、非常に深く、広く浸透しています。

五 安定志向

それがどういう風な「青い鳥」志向現象を示してくるかと申しますと、第一は安定志向です。大正九年は、大学への進学率が同世代の一パーセントですが、今は、三十六パーセントぐらい、東京都あたりは五十パーセント以上になっておりますので、石を投げれば学生に当たるぐらいいます。昔は少数エリートです。だから「学士様なら娘をやろうか」と、今は誰もそんなことを言ってくれない。「東大、京大卒ならやろうか」と。昔は角帽の付けでお酒を飲めた。今はそんなことをしたら飲み逃げされないかと怪しまれる。第一に角帽を被っている奴もいませんね。応援団

か空手部ぐらいです。今は少数エリートの方から、知的教養あれども将来を約束されていない知的プロレタリアの大群に化しているのです。ですから、どうしても一流会社に行くためには、一流大学に入らなくてはならない。ところが、ご承知の共通一次テストが出来ました。メリットはあると思います。なぜかというで一発勝負の悲壮感がなくなってきました、受験生は非常に朗らかであります。しかし、悪いことに一学期、二学期の差はなくなりましたけれども、全国の国立大学が偏差値によって縦に序列化されて、本当にやりたい学部より、入りやすい学部を選ぶのに都合がよくなった。つまり「消去法的入学」で、難しいのから消していって最後に残ったのを選ぶ訳です。ですから、この頃は、入りたくない不本意入学者が非常に多くなりました。おまけに、学生が多いのですから、せっせと授業に出て優の数を稼がないと、一流会社へ行けないということになってくる訳です。だから、京大でも出席率が良くなってきたので、先生方は喜んでいらつしやる。「大学紛争によって、我々が大いに自己批判した結果である」とか。しかし、私はそうは見えない、学生の裏から見ると、全然逆に見える。そして、一方ではレジャーをすごく楽しむ訳です。だが、優を沢山稼ぐことと、レジャーを楽しむこと、そして、レジャーを楽しむためにはアルバイトをやらなくてはいけない。バイトをやりながら、レジャーを楽しんで、かつ、優を稼ぐという三者をうまく鼎立させるというのは名人芸に属する。それをやれるのが最もナウい学生ということになって女子学生にもっているのです。見事にやっている者がいます。私に言わせた

ら、その核心はプライティズムだと思います。他方、エースカレーターに乘れない子供達は中学時代から反乱を起こしている。校内暴力のパターンの最初は校舎に対するらくがきから始まる。次にガラスを吹っ飛ばす、三番目には「先公」をぶっ飛ばす。ぶっ飛ばされる先生が一番多いのは、英語と数学、つまり彼らの標的は何であるかということではっきりしている。先生の中には空手を習っている人もいる。空手とナイフを手にすることは紙一重です。聖書（コリント第一の手紙）で、パウロは「弱い人には弱い者になった。弱い人を得るためである。」と。落ちこばれて校内暴力をやっているのは本当は弱虫なのです。それに対して、先生方は強くなる努力をしている。力には力をもって制する、これが横に「いじめ」になっていくのです。これでは教育の敗北であると思うのです。エースカレーターに乘れなかった諸君が反乱を起こす一方、乗れた諸君は先にのべた様な状態になってしまう。これが現下の日本教育の根源的な問題であります。

六 合理主義

第二の傾向としては、非常に合理主義である。これは「金と時間」を非常に大事にします。その一つの例は、京大キャンパスの近くに小さな映画館があるのですが、これは名画三本立五百円、非常に安くて、長時間楽しめる様になっていて、一本ポルノ映画抱きあわせです。つぶれかけたために署名運動が起こってきたので、私は視察に出かけましたら、朝の早くから京大生であふれ

返っていました。これは安くて、非常に合理的なやり方だなあと感心しました。たまたまコンパがあり、飲みにつれ出されても、「割りかん」というのが殆んどですね。中に奢る奴がいると、稀少価値があつて、皆からたかられてばかりいる「滅私奉公」の生き残りみたいな奴もいますが、そういう合理主義は日常に行き届いています。そして、不登校であるとか、自殺に瀕した学生の下宿を訪問することがあるのですが、訪ねると、およそ鎮座しているのがカラーテレビ、小型冷蔵庫とステレオですが、中には電子レンジまで備えている者もいる。また、バイトでレジャー費を捻出したり、高価なスポーツ・カーを買ってガール・フレンドを積んでキャンパスに横づけする。だいたいポンコツ車で来る人は皆、教官でありまして、新車に乗っているのはたいしてい学生です。さらには、裕福社会になりまして、考え方も合理的になっているから冒険が怖い。挫折や傷つくことを避ける。いつか私の相談室の前に大きな木が茂りすぎているので、一人の学生に「君ちよつとすまんけどノコギリで枝を切ってくれへんかな」と頼むと、「落ちてケガする」とビビるので、私がやっているのと、下から彼の声、「先生あぶないでっせ、気をつけて」という、あほらしくなつて手の力がぬけて落ちかけたことがあります。

七 余暇

三番目は余暇を非常に大事にしますね。自分の人権の一つみたいに。いつか、キャンパスに新

入生歓迎の柔道部のピラが出ていました。「まず柔道を、次に勉学を」と書いてあるのですね。それは無理もない訳であります。高校時代から「四当五落」のハイスクールでしごかれている。「四時間寝ている奴は入る。五時間寝ていたら落ちる」と。ですから、大学に入ってから反動的に遊ぶというのは当然の成りゆきであります。いつか、教養部のグラウンドを通りかかりましたら内ゲバがありました、二、三十人の学生がチャンチャン・バラバラをやっている。横で野球部がのんびりシート・ノックをやっている。私が心配したのは、野球部の連中がバットをかついでどっちかに入るのはないかということですが、一向に変化が起こらない、ちゃんと両方とも両立しているのです。考えてみたら、両方とも大事な余暇の選択ですから両立するはずなのです。「余暇」というのはギリシャ語でスコラ、ここからスクール（学校）という言葉が生まれた。だが、今や学問のための余暇でなくて、レジャーに使う。その暇に出席する訳です。また、リクルート・センターの調査などでは、余暇に本を読む量というのは非常に少ないですね。今、全国平均でだいたい雑誌を除いて、一ヶ月の読書量が二、三冊です。これが一番多いのですが、二、三冊というと昔の若者の一週間のポリュウムです。読んでものを考えるということが後退している。

八 フィーリング世代

第四に感覚主義で、非常にフィーリングを大事にする。現代の若者の言葉で、「グッとくる」、

「イカス」、「シビレル」、「カッコいい」とか末梢神経を刺激する様な言葉を口にしている訳ですね。ものを考えないから、すぐに「頭にくる」とも言います。ですから、キャンパスでもロダンの彫刻のごとくあごに手をあてて考え込んでいるのは、大抵ノイローゼであります。ものを考えて悩むのがこわい状態なのです。いつか、ある学生が来まして、「本を読みますと、青年期は色々悩まねばならないとありますが、私は悩みがないのが悩みであります」といっていました。こんなのはまだましな方でありまして、多くはそれ以前のところにいる訳です。だから、今頃の学生は、ちょっと寝られなかったらすぐ睡眠剤に手をのばす。「ああ、不眠はわざわざいなるかな」と。スイスの思想家カール・ヒルティは「不眠は神の賜ものである」とし、寝られぬ夜こそは、悶々として悩むことによつて魂が高く飛翔するとしています。が、「不眠は災いなるかな」で、根源的な人間の問題にぶつかるといふことがない。だから、絶望を非常に怖がるのですね。評論家小林秀雄さんは「絶望するにも才能がいる」と書かれています。今や絶望を知らない若者こそは絶望的であると言わざるをえません。

九 小集団依存

次に、ひとり孤独になつてものを考えたくないものですから、皆でワイワイとにぎやかにやりがる四、五人位の小集団依存の傾向が強い。ところが、十人ぐらいになると、とたんに便秘す

る学生がいますね。「自分を出したくない」と、そういう身体的表現ですね。四、五人で仲よくワイワイすることは、考えてみれば「マージャン集団」です。だから、極楽トンボみたいに、温かい陽だまりに群れていて、一匹狼はいやで、少しでも風が吹くと移動したがる。

さらに、少産長命型で子供が少なくて、母子がゆ着している環境を長く引きずりますから、どうしても、男の子は男の子らしくなくて、自立は出来ないし、何か妙に女性的なのです。これは本当の「優しさ」ではない。バスを乗る時に押しあいへしあいするいやらしい猛々しさはなく、おとなしく乗りますね。しかし、乗って老人席に座ったらテコでも動かない。これは本当の優しさではない。私はこれを「不甲斐なさ世代」という。若者に対する私の採点は非常に厳しいかもしれませんが、ちつともゆるめる気にならない。

一〇 異性関係

最後に、対異性的には進歩しています。これは男女共学のお蔭だと思っています。ところが、進歩しすぎて失われるものも多いのです。第一に恋愛と結婚を別々にしている。女の子で最も端的なあらわれは「ボーイ・フレンドは〇〇大だ。用心棒は××大だ。結婚するなら東大、京大」とちゃんと分けているのです。また、恋愛するのにも今はスピードが早いです。一週間目にアイ・ラブ・ユーです。二週間目にキッスです。三週間目に終着駅です。そして、妊娠したといって相

談に来るのですね。昔はもつと旧東海道線を旅するよさがあった。途中下車しながらね。今は新幹線時代です。あつという間に終着駅に着きます。昔は途中下車しながら、悶々として初恋に悩み、文学、哲学にひかれ、そして「初恋はカルピスの味」といつていた。今は失恋しても「スカッ」と爽やかカコーラ」という状態であります。全部、尻はカウンセラーのところへ持ってくる訳ですね。ゲートは「恋愛は教養の始まりである」と言っていますが、私に言わせれば今や「恋愛は妊娠の始まりである」と。昔はアイ・ラブ・ユーと言うまで一年ぐらいかかる。二週間目にキッスなんて恐れ多くて、彼女の髪のほつれが頬にかかっても電気ショックうけたみたいになつてしまつて物も言えなかつた。また、デートが多くなつた。これはいいことだと思います。いつかある学生が「先生、デートと逢引はどう違いますか」と聞きに來ました。そんなことを勉強していたら京大に入れないのでカットして大学に入つて來ているのですね。中にはラブ・レターの原稿を持つてくる者もいて「先生添削して貰えませんか」という。今頃の学生は字を知らないものですから念のために見てやつたら、大変な誤字がありまして、十年の恋が一度に醒める様な字を使つていたので見かねて直してやりました。「結果はどうだった」、「あきませんでした。先生、ラブ・レターつてどういう風を書くのですか」と聞くので、私は難しい顔をして、「ラブ・レター」というものは、天地の神々に祈りつつ、辞書を引きつつ書くべきものや」と言つて、デートと逢引を定義して、「デートとは不特定多数人との表面的、皮相的人間関係である。逢引は一特定個

人との永続的人間関係である」と。

一一 多忙の罪

総括しますと、今の若者は忙しいのか、暇なのか——という問題について、私は「忙しい」と見ています。なぜかという、試験が一年に二回あります。昔は一回です。そこにもってきて週二回のバイトです。アメリカ式にサークルも文化系と体育系の二つに入る者もいる。クラス討議もあります。バイト・試験・サークル・クラス討議。しかも、昔はデートは一人でよかったが今は多数です。だから忙しい。いつ勉強するのかと思うんですけど。内村鑑三がいった「多忙の罪」を感じます。忙しすぎることに由る罪、何時もセカセカしてて深まらない。飲み屋のおやじさんがぼやいていますね。「今頃の学生さんはもうかりませんわ、十時頃になったら時計ばかり見ている」と。

一二 生きがいとは

さて、後半のテーマに入りますが、こういう諸君をどの様にして真の生きがいに転回していくように助けるかということです。

最初に、今の若者は「私生活の幸福」を生きがいにすると申しましたが、それは真の生きがい

ではないと思います。まず、幸福と生きがいは違う、生きがいは「浄福」に近いということを考えてみる必要がありますね。このことを明らかにしたのは神谷美恵子という女性精神医学者です。その名著『生きがいについて』の中でどの様に区分されているかというところ、幸福は自我の周辺に關わって現在志向的であり、生理的要求の充足を重んじ、生きがいは自我の中枢に關わって未来志向的であり、価値的響きを持つと。さらに次のように区別されます。幸福は自我の周辺であり、現在志向的であり、生理的欲望を重んじるので、たえず気晴らしを要する。生きがいはそれ自体で常に満たされているので気晴らしはいらないし、他人を顧みるゆとりがある。幸福は他人と比較し、結果を重んじるが、生きがいは逆である。今の若者はいずれ実人生の中でこの重大なあやまちに気がつくと思います。

さらに神谷さんの論述によりますと、生きがいは「日本語特有の言葉である」と書かれている。そう言われてみると、確かにそうであって、ドイツ語、英語、フランス語にもびったり当たる言葉はありませんが、日本語特有とすれば、語源から考えてみると、「かい」というのは、「替（か）う」「交換する」という意味、及び、「効（か）い」も含んでいる。つまり、一回きりの人生を交換し効いがあり、「死にがい」で成就するというのが「生きがい」であるといえます。

これを一步進めて、外国で核心をより明確に示したのは第一にドストエフスキーだと思っています。彼は『死の家の記録』という作品の中で、若い時にシベリアに流された体験記を書いています。

四年間流されていて、シベリアの刑務所の果てで見ていると、囚人が臼で砂をつくとか、二つのバケツの中の水を互いに入れかえているとか。そうしていると、首をくくるか、精神病になると、「臼で砂をつく」というのは無意味な仕事です。無意味なおさんどんの反復には主婦は耐えられない。主人や子供のためと思えばこそ耐えられる。学生は無意味な単位稼ぎには耐えられない。従業員は無意味なコンベヤーの仕事には耐えられない。何のためにどこへ行くのかという問題が大事だということをドストエフスキーはすでに示唆しています。

さらに、一步進めたのがウイン大学の精神医学者フランクルです。彼はナチスのアウシュビッツ強制収容所支所にほうり込まれて、そこで両親と妻子を失ったが、本人のみ奇跡的に生還した。その体験記が『夜と霧』であります。

そこでは、囚人が将校の前で、まだ使いものになると見られると指先が左にふられる、朝から晩までボーランドの平原で一杯のスープとパン屑で強制労働、その果ては無感動な石ころみたいになってしまふ。人肉嗜好まで出てきて、発疹チフス、飢餓、栄養失調になる。使いものにならないと見られると、指先を右に振られる。「ナチスの将校は指の遊びで……」とフランクルは書いていますね。気まぐれに左右に振りわけられる。多くは右に振られた囚人たちは二百人一度に裸に

して、「消毒する」と称してガス室に入れられ、数十分後に死体になる。それを焼却炉で焼き、粉碎機で粉碎し、運搬機で運搬する。人間最後の名誉である埋葬すら許されない。「石になるか灰になるか」のはざまの地獄で、フランクは「地獄よりまだひどいところである」と書いています。

一四 創造価値

そこで、フランクは何によってそのどん底に耐ええたか、丁度、私がフィリピンの戦場のどん底でセメダイン論理で自分を支えたごとく、もしそのセメダイン論理がなかったらガタガタになっていたと思いますので、フランクのを読むと非常に身につまされます。だが、驚くべきことには、彼はこの地獄よりひどいところで、段々と医師としての自分の「役割」に目覚めています。絶望であえいでいる囚人達を見舞って、グループでカウンセリングをしている。さらに終戦近い頃に逃亡計画が出来て、自分も加わるはずであった。それとなしに別れを告げるために世話している囚人を見舞った。ところが、その計画を漏れ聞いていた一囚人が弱々しい声で「君も逃げるのか」と聞いた。翌日彼はやましい感情を感じて残るのです。そこに医師としての使命感がある。

さらに、次のエピソードがサラリと書かれています。ある日、陽なたぼっこをしていると、逃亡しかけた三人の囚人が走って来て、「隠してくれ」と言う。そこでマンホールのフタをあけて中

に隠し、屍を下ろして石をほりながら兵隊の目をそらしたと書かれている。私はこれを読んでびっくりしました。これがバレたら、いっぺんに銃殺です。これがためにコルベ神父の殉教があるのです。コルベ神父はやはりアウシュビッツに収容されている時に、ある日一人の逃亡囚人が帰らなかった。それでナチスは替わりに十人処刑するために、背番号十人読み上げて「一歩前へ」と、名前を呼び出された人の中の一人が「妻子があるので死にたくない」と泣き出す訳です。そうしたら、後列から替わりたいたいと言う人が出て来た。それがコルベ神父であり、他の九人と一緒に地下牢に入っていくのです。地下牢からは最後まで賛美歌の聲が、絶えなかったそうです。つまりイエスが言われた「友のために命を捨てる、これより大いなる愛はない」という言葉に身をもつて殉教するとともに同時に他の九人に天国をもたらし、十人を救うために自分は地獄に下る訳です。石を投じているフランク医師の姿が、私にはコルベ神父と同じ様に見えます。一方は神父であり、一方は精神科医ですが、同じ使命感が地獄に耐えさせています。彼は『夜と霧』に「私を待っている誰かがあり、仕事がある限り、どんな状況にも人は耐えうるものである」と記し、そして、ニーチェの次の言葉を引いています。「何がために生きるかを知るものは、いかなる生き方にも耐えうる」と。ニーチェのその言葉は本当であるということをもつて証明する訳です。それについて、彼は役割・使命を達成することによって新しい価値をうみ出すのを「創造価値」と言うのです。

一五 体験価値と態度価値

ところが、仕事を介する役割だけが生きがいではない、それは「私を待っている誰かがあり」の中には、患者以外に、妻のことも含まれているのです。妻はどこかの町角で自分の帰りを待っているだろうと彼は思っていたのですが、その時すでに「煙突の煙」になっているのを彼は知らないままに、次のように書いています。ポーランドの平原に強制労働に出かけて一日が暮れた。壮大な夕焼けを見ながら、囚人達は感動して声をひそめている。一人の囚人が叫ぶ、「まあ、自然はなんとこんなに美しいだろう」と。囚人が自然の美に感動していることにフランクは感動している。心は「石」になっていない。朝焼け空のかなたに妻の面影が浮かんだ。そして、妻と対話して次の様に記しています。「自分は彼女とは短かったけれども、出会っただけでこのすべてを償って余りがある」と。つまりフランクが言いたいのは、何も「役割」だけが生きがいではなく、美や愛の体験にもある。これを「体験価値」と呼ぶ。今一つ彼が書いているのは、囚人達を見ていて、自分がユダヤ人であるのを呪っている囚人はバタバタと倒れていった。ところが、宿命に対する呪いを人間らしい品位ある態度で運命に対する感謝に切り替えている囚人は地獄に耐えていると。これを「態度価値」といつている。

最後に、この三つの価値を深く教えてくれた自殺念慮学生との出会いを申しあげて終わりたい

と思います。

一六 半生を顧みて

顧みれば、この三十年近くの半生に色々な学生と出会ってきました。今だから時効でいえますが、例えば、弥勒菩薩のキッス事件というのがありましたね。魅せられてキッスして仏さんの指を折ってしまった学生です。これはオフレコですが、私のところへ自首してきましたのです。無事、彼も助けられ、国宝第一号も元に戻りました。それから、殺意や敵意に接触したのは少なくとも八件ぐらいです。さすが、失恋した女子学生を消すと言うのが一番多くて三件ぐらいでしたか、また他大学の学生から狙われたうちの女子学生が一件、その他と。すべてことなきをえましたが、或る例では、当方が公務殉職の恐れを感じたこともございます。

他方、自殺では、深夜によく電話が自宅に掛って来るのですね。家内は「あんたの電話に決まっている」と言って起きませんわ。なるほど起きてみたら、ガス管を開いてから電話してきたり、いつかは「最後に先生のお声を聞きたくて」と言う電話がありました。「ツラも出さんで自殺をするとは学生の仁義に反する」とどなったら、翌日、出て来たので叱りとばして「ヤクザ以下だ。ヤクザも盃かえすのにツラ出すやないか」と。この件は助かりました。中には、「先生、先に極楽へ行って待ってまっせ」と言うので、「何いってんだ。俺は天国へ行くんだ。行く先がちがう」と

言うと、ゲンナリしていました。

これらの危機介入というのは、こっちは沈黙を許されなくて、わりこむために何とか応答しなくてはならない。これが厄介なのです。いつかも、非常にストイックな女子学生が電話で自己嫌悪から「私は淫乱です」と言うのです。私は電話を聞きながら「君が淫乱と言うなら僕なんか大淫乱だ」と言っていると、家内が起きてきて「何言ってるの、夜中に、気でも狂ったの」と言われたこともありました。キャンパス・カウンセラーという仕事は安楽イスで来談を待ちぬく訳にもいかず、本当に厄介なもので、ほとほとくだびれました。これから竜谷大学で若いギャルの「生き血」でも吸ってのんびりと休養させて貰おうと思っっているのです。さすがに京大は大物が多いので鍛えられましたが、逆にいえば、そこで出会う京大生の素晴らしさとか、否、若者の素晴らしさ、人間の素晴らしさに引かれてきました。

一七 創造価値の例

これから申し上げます例は三年程前に出した拙著『青年の生と死との間』に書いた例です。点訳されたり、韓国で翻訳されまして、私は韓国にも行ってきたのですが、これらの例はフランクルの三つの生きがいの構造と助け方を教えてくれました。

第一は裁判官になった法学部のある学生です。一年間進路の相談に来ていた学生で、本当の間

題は「進路の問題」でなくて、車にぶつかって死にたいという交通事故擬装の自殺の意図を打ち明けたのです。「私が死んでも泣いてくれる人がいないので死にたい」と言うのです。彼の生育歴を申しあげないと判っていただけなのですが、お父さんは外地で戦病死、お母さんは引き揚げの苦勞から戦後病死された。本人は一人息子なのです。戦争孤児になったのが十一才、伯父夫婦に引きとられて、小、中、高、大学四回生まで来たのです。卒業しても喜んでくれる両親がいないと思った時に、両親に会いたいという「再会の願望」が燃え上がったのです。片親の家庭で自殺がよく起こりますのは、再会の願望で説明が付きまゝです。この例は、「私が死んでも泣いてくれる人がいないから死にたい」と。その陰の聲は、「泣いてくれる人は二人ともあの世にいる。会いたい」という再会の願望を感じさせる。アンデルセンの『マッチ売りの少女』の物語もそうです。雪の日に、おばあちゃんの面影を見て死んでいく。あれは少女の自殺願望です。『ロメオとジュリエット』もそうです。彼の背後が判った時、私は絶望しました。立派な両親があゝの世にいる。こちらは、二十数年前の駆け出しカウンセラー唯一人でしょう。二対一で本人を真中にして綱引きをしている。これはとうてい勝てない。この青年の生命を地上につなぎ止める者は誰もいないだろうと思った。プロのカウンセラーがお手上げとなったら、必ず肉親に自殺と犯罪とは知らせなくてはいけない。伯父さん夫婦は遠くに住んでいるので二日間延ばすことを考えた。「君、一緒に飯を食わないか」と連れだし、彼が酒を飲みたいと言うからそれも付きあいました。その時点で

は、カウンセラーとか教師とかの姿勢は捨て去っていましたね。それから、終電車まで茶店でモダン・ジャズを付きあいました。最悪の時間と場所だけをともに過ごしている感じだけはあった。彼と別れてトボトボ家に帰りながら、星の綺麗な夜、星のあなたに祈りたい気持ちでした。翌朝までそういう心境でした。翌朝、大学に行ってみると、来て待っているのです。そして「先生、死ぬの、やめました」と一言、その時、「なぜ」と聞く必要がなかった。今この時点で車にぶつかれば、私にも泣いてくれる人がひとり出来たということが伝わっていると伝わってきて、聞くことはかえって邪魔になりました。普通、言葉は人間の触れあう媒体になりますけれども、「桃李不言」で、かえって言葉が邪魔になるということをはじめて経験しました。

彼は卒業の前にやってきて「先生、最後に残った相談があるのです。一生独身で行きたい」と言うのです。「なぜか」と聞くと「私は愛する両親を戦争で奪われた。戦争に報復するためには、地上に正義を実施することを生きがいとしたい。しかるに、妻子があつて利益で誘惑されると公平な裁判が出来ないので、よつて独身でいたい」というのです。法学部の諸君は三段論法が好きですね。それで、私は三段論法で切りかえたのです。「しからば聞くが、君が裁く被告の中に親を殺す子供、子供を殺す親もいるだろう。しかるに妻子なくしていかにしてその悲しみを正しく理解して、公正に裁けるか聞きたい」と言ったら、じつと考え込みまして一言、「結婚します」と言つて帰つていった。実にあつけない別れ方で、それつきり彼とは会っていません。でも、後日

談があります。三年ほどした後に我が家にハガキの挨拶状が舞い込んだ。「司法修習生を終わり、判事補に任官し、〇〇地方裁判所。」と。そこに添え書がしてあり、「任官と同時に女房を貰いました」と。それを見た途端に、遠方の彼に「バカヤロー」と怒鳴りたくなりましたが、よく考えてみると、「私との対話をまだ覚えていますよ。任官と同時に女房を貰わないと公平な裁判が出来ない」といつて別れましたね」という陰の声を感しました。この男は最初から最後までストリートに物を言わないで、陰の声で喋る。それほどに時代とか大人に対する不信感が強かったのです。

この例は私が長らく彼と関わっておって、「カウンセラーだ」と言う意識を捨て去って、最悪の時と場所とを共にした時に出会いが来た訳です。ボルノーという教育哲学者は「出会いが賜物である」とも書いています。天からまさに降って来た訳ですね。私は自分の著書の中では「二人に救いが与えられた」という「二人」に、傍点を打たざるをえなかった。救われたのは彼一人だけではなかった。この例は、辛うじて彼と共にありうることで私も窮地から助けられた。そして、出会いをもとに公平な裁判官として生きるという役割、いふなれば「創造価値」で生きがいを見出しつつあった訳です。

一八 体験価値の例

第二の例は文科系のある学生ですが、彼の友達がやって来まして「友達が危ない。下宿に来て

ほしい、自分も相談があるのですが」と頭を掻いている。私はいいい友達だなあ——と思った。自分のことをさしおいて友人を助けてくれというのです。「どうしたの」と聞くと、友人は「死ぬことだけが美だ」と言い出したという。これを聞いて大物だなあ——と思った。死ぬことが美だったら生きるのはそれ以上の美だ——ということを教えられなかったら死なれることは必至だ。私にはそんな自信は全くなかったが、下宿に行ったら、風邪気味で寝ていました。二人でお茶を入れようと電熱器で湯を沸かしたのはよかったですけど、どっちかがひっくり返してしまった。お茶を入れるのを止めるのかなあ——と置いていたら、「死のみが美だ」といつていたその男がもう一度お茶を入れてくれた。その瞬間、助けられると直観した。後からつけた理由によると、「死のみが美だ」と言いながら、まだ他人を顧みるゆとりが残っている。そこに出会いの可能性を直観したといえます。そして、直観通りの結果が到来した。というのは、変わった学生で、ハガキを一枚持ってきて、これを担保に「千円貸してくれ」という。親父と喧嘩して仕送りが途絶えてしまったので、友人の借金を取り立ててから返すという。カンウセラーは大金を貸してはいけないことになっている。依存性を高めるし、利害関係が入ってきますから。ところが、そのハガキを見ますと、ドイツ語で「生きるとは愛することである」と書いてある。「人生は愛である。」とはゲーテの一言です。こんなハガキを見せられたら、誰でも千円位貸しますわいな。私はニガ笑いをして黙って千円を渡しまして、ハガキをありがたく担保に頂戴いたしました。また、彼は

お歳暮と称して私の部屋にハガキを届けましたが「バッハの作品に『音楽の捧げもの』という曲があり、美しい心臓の鼓動を奏でています。それは止めてはならない」と記していました。つまり、愛や美というものの「体験価値」に生きがいを見い出したわけで、無事卒業いたしました。

一九 態度価値の例

最後に、「態度価値」を教えてくれて、亡くなった学生がいました。これは自殺ではなく慢性腎炎になって在学中に死んだ文科系学部 of 学生です。相談室の前でボケーツと青白い顔で患者服の学生が立っていました。「どうしたのだ」と聞くと、「病院の屋上から飛び降り自殺をやりかけて、ここに直行して来た」とのこと。「なぜ死にたいのか」と聞くと、在学中に病死せざるを得ない。おまけに、或る生殖機能を手術で失っている。愛する彼女がいるのだけでも、彼女を幸せに出来ない。彼女は一生、面倒を見ると言ってくれているが、愛するがゆえに彼女を断念せざるをえない。また、癌にかかっている両親より自分が先き立たねばならない悲しみがある。小さきまぎまの死に囲まれた青年に、私は言う言葉がなかった。やつと語りえたのは聖書の次の一句です。「せん方尽くれども望みを失わず」と言っただけなのですが、次第に寝たきりになったので、電話交信をしました。あの時ほど電話の有難みを痛感したことはありません。いつも寝たきりの彼と一緒にいたということ。これは現在私が「いのちの電話」に関わることになった

大きな動機のひとつです。時々は見舞いに行っていたのですが、彼が会いたがっているという担当看護婦の電話で尋ねると、彼は淡々として、検査値が下がって死が近いことを告げました。そして、私の手を握って「先生、幸せでした」と一言言った。私は声がつまってしまつて、やっと語りえた言葉は「たとえ死が来ようとも、迫り来る死を究めつくせ、死とは何か」といつて別れました。彼はうなずいていました。

それから、年を越しまして、彼女から彼が病死したという知らせを受けた。病院に飛んでいくと、彼は解剖にまわされていまして、彼の個室は私物品はなかったのですが、壁を見た時に棒立ちになった。「詮方尽くれども望みを失わず」と書かれた紙が残っていた。この言葉が彼の最後を支えたに違いないと思つた。彼の最後を聞くために主治医に会つた。主治医は次のような打ち明け話をしてくれた。彼は死ぬ前日まで自殺の危険性があつたので、医師団と看護婦団はそれを嚴重に警戒していた。ところが、彼はその道を選ばずに、最後に医師、看護婦を集めて深い感謝を表明して、「宇宙に帰る」と一言総括して、意識を失つて二日後に心臓が停止した。腎臓がとうに破壊されていて、なぜ二日間も彼の心臓が支えられたのかよく判らないという訳です。これを聞いて驚きました。彼が病院の屋上まで追いつめられたのは、病める身体が彼の心を追いつめたわけです。それから以後は、病める身体は心に影響するが、それ以上に心が身体に優越しうるという戦いを切つて落とした。それがみごと彼の勝利に終わつて、二日間も延命している。ゲートが

ファースト第二部を完成するために集中して延命したのと同じものを感じるのです。しかも、私は彼に「死とは何か」という課題を与えた。そして彼は「宇宙に帰る」といった。宮沢賢治が次の美しい一文を残しています。「もろともに輝く宇宙の微塵となりて無方の空に散らばろう」と、こういう堂々たる死にざまを彼は見せてくれた訳です。身体が心に影響するが、否、それ以上心が身体に影響しうるということを証明し、自殺という道を選ばずに自然死を選んだ訳ですが、その死にざまは、フリードリッヒ大王が幾度か自殺の危険に頻しながら、生涯子をなすことなく、敗戦国プロイセンを立て直した。ゲートやフリードリッヒにも匹敵する勇氣と精神力がこの無名の青年の中にも眠っている。否、我々にもありうるということを教えられて、私自身が慰められ、励まされるのです。この例は寝たきりでありますから、「役割」を通じての創造価値も許されない。また、美や愛の体験価値を限られていながら、なお宿命に対する呪いを感謝に切りかえていった例だと思います。

二〇 私への支え

この三つの例から私は非常に多くのものを教えられ、さすが京大生だなあ——という感じを深くしているのですが、ソウル大学の学長さんにお会いしましたら、開口一番、こういう質問がありました。「なぜ京都でノーベル賞が四人も出るのか」と言われて、私は困ってしまっただが、とっ

さに答えたのは「京大ではノーベル賞は多いかもしれないが、留年は多いし、学生運動は盛んだし、精神疾患は多いし、自殺は多い。要するに自由の修羅場ですから」と申しあげたら深くうなずいておられた。まさに「自由の修羅場」ですが、考えてみましたら、私は第三高等学校の伝統がやはり背後になお生きてあると思います。

とはいえ、そのゆえにしんどくなって、三度も辞めかけたことがある。一度は滝川総長の暴行事件で、総長の肋骨にヒビが入った時に補導主事として辞表を出そうとした。第二は私が長く関わったあるクリスチャン学生が私に遺書を残して自殺を遂げた時。だが、そこで辞めたのではカウンセラーは何人もの首があっても務まらishi、後進のためにも良くない。そこで、弔い合戦で全国の自殺京大生の遺族を訪ね歩いて、四、五年ごとに全国を回り、追跡調査二十五年研究を最近やっと終わりました。第三はカウンセラーの万年助教教授に某大学から教授に招聘された時も正直いつて辞めたくまりました。だが、そこで辞めたのでは一筋につながる先達や仲間にし訳ないということだ踏み止まった。考えてみますと、決して格好よく我が道を歩いたとはいえないので、とてもじゃないが、芭蕉のごとく「我ついに無能無芸にして、この一筋につながる」とはいえない。むしろ、弟子の宝井其角が「我が雪と思えば軽し傘の上」とした態度そのものです。豪雪というか、重たい冷たい雪をびっしりとかぶりながら三度よろめきつつ、「我が雪」と受けいれる一ぺんのゆとりで何とか耐えて来たという思いです。

だが、愛の体験価値も私を支えてくれたといえます。出会いを通じて絢爛として見せてくる京大生の素晴らしさ、若者の素晴らしさ、人間の素晴らしさ、そこにおける出会いの感動であります。例えば、ある他大学の女子学生は恋人が自殺したので、自分を責めて自分が危なくなりました。私との偶然の出会いがありまして、助かりました。その年、正月に素晴らしいメッセージを送ってきました。「先生と同じ時代に生まれて幸せでした」と一言書いてあった。こんな素晴らしきメッセージをたまに貰うことがあるので、この仕事は仲々辞められなくなってきました。最近も、ある他大学の学生でしたが、両親はじめ先生方の援助関係もすべて失った末に、思いあまつて他大学のカウンセラーに綿々とした長い手紙を送ってきました。そして最後に乱れた字で「私には今助けられたい気持が一つある。他方、誰も本気で助けてくれないのだから、もう人生を辞めたいという気持がある。愛と信頼はまだ地上に残っているのだろうか」と。何のことはない。長い遺書です。こういうわびしい手紙を他大学のカウンセラーが貰わなくてはいけないというのは、なんと日本の学校は心の出会いに欠けてお粗末なことかと思うのです。

二一 おわりに

今や大学のみならず中高校においても問題が様々に噴出してきていますが、今後、本当に中曽根首相のおっしゃる「不沈空母」になるためには、徒らに武装を拡大するよりも、昔に戻れない

だけに、若者たちが本当のしたたかな生きがいに目ざめなければ、思いやりある心通うコミュニティともならず、これからの日本の社会の将来は内側から危ぶまれると思います。

私は三高で、対一高戦の応援団副団長をしていましたが、あの当時、応援団のモットーは「求めて苦しみ」というのでした。だから、私は人間の根源的な問題エゴの罪業感とぶつかって、寺に宿して歎異抄その他の仏典から色々な宗教古典を乱読していた時期があり、「宗教乞食」ともいわれました。そして、ドストエフスキーとの出会いを経てキリスト教への道をたどりましたが、親鸞の仰せでは「煩惱即菩提」と。だが、いくら煩惱の「我執」に悩んでも、菩提で「淨福」につながらない。とことん援助者が必要となり、キリストの近い助けを必要とする様になったのですが、おわりに、そういう若き日のことを思い出しますと、今の若者が裕福社会の中でそういうぎりぎりのところを通過せず、唯一身の「幸福」を求めているということは「青い鳥」症候群を広げ、非常に大きな問題が今後の教育に残されていると思うのです。私が申しあげたことが今後、少しでも若者たちのために役に立てば大変幸せに思います。

（龍谷大学教授・京都大学名誉教授
前京都大学学生懇話室カウンセラー）